教科書に書かれなかった戦争Part 12

大陸の花嫁

「満州」に送られた女たち——

陳野守正

梨の木舎

教科書に書かれなかった戦争 Part 12

「満州」に送られた女たち——
大陸の花嫁

深野守正

梨の木舎

陳野　守正（じんの　もりまさ）

1930年福島県に生まれる。公立高校教師を退職し、現在嘱託として勤務。東京都在住。

著書　『凍土の碑—痛恨の国策満州移民』（教育報道社　1981年）
『アジアからみた「大東亜共栄圏」』（共著、梨の木舎　1983年）
『先生、忘れないで！——「満州」に送られた子どもたち』（梨の木舎　1988年）

■教科書に書かれなかった戦争 第2部 Part 12
満州に送られた女たち——大陸の花嫁

1992年7月20日　初版発行
著　者　陳野　守正
装　幀　宇田　敏
発行者　羽田ゆみ子
発行所　㈲梨の木舎
〒101 東京都千代田区神田神保町1-42　日東ビル
☎Fax.03(3291)8229　振替 東京61-67140
印　刷　㈱太平印刷社　埼玉福祉会

はじめに

もう十年ほど前のことである。那須連峰の残雪を眺めながら、私は福島県のある山村に元満蒙開拓青少年義勇軍（以下義勇軍）森崎実氏を訪ねた。森崎氏は話の中で、「満州移民（開拓団）の男たちは、現地で敗戦を迎えた女たちの悲惨を極めた実状をよくわかっていない……」と慨嘆していた。今もその声は耳もとに残っている。

一九三二年（昭7）から満州のソ連国境地帯や抗日ゲリラが出没する治安の悪い地域に入植させられた満蒙開拓団（以下開拓団）は、一九四五年夏、ソ連軍の満州進攻と日本の敗戦により崩壊した。男子団員を関東軍に根こそぎ動員され、残された老幼婦女子たちはその後悲惨な逃避行、悪条件の収容所で地獄のような越冬生活を送ることになった。召集や動員で団を離れた男たちは、その後、女たちのような過酷な体験をせずに復員できた。そのことが、シベリア抑留者は別として、女たちの筆舌に尽くせない労苦を理解できずにいるのだろう。元開拓団員の中にさえそういう人がいることは、容易に信じられない思いであった。

私なりに各開拓団史、引揚げ記録などを読み、また体験者の聞き取りを重ねてきた。これらから明らかになったのは、お国のためとか、沃野千里の大陸における村づくり、といった美名の宣伝におどらされ大陸の花嫁として満州に渡った女性たちが、最後、屋根に上ったはしごを外されたように、送り出した日本政府と、いざというときは守ってくれるはずだった関東軍に見捨てられてしまったという事実だった。彼女たちのなかに、異国の地に朽ち果てた人、心ならずも中国に残留し苦渋

に満ちた戦後を生きることになった人たちが多かったのはその結果である。

満州移民の犠牲を考えるとき、義勇軍の若者はもちろんのこと、女性と子どもたちこそまず取り上げられなくてはならない。にもかかわらず、開拓団団史などを読むと、女性の存在感がきわめて薄いのだ。団史である以上団の歴史が主題となるのは当然としても、執筆者は主に男性で、女性の寄稿があっても多くは敗戦後の悲惨な体験記である。大陸の花嫁に関する記録は単なる付け足し程度の説明で終わっているといってもよい。

歴史のなかに埋没しているかに見える大陸の花嫁が、今日、中国残留婦人の名で社会問題となっているのは歴史の皮肉ともいえようか。いかに歴史から消そうとしても、残留婦人の問題は二世、三世の時代に移った後も厳しい課題を日本人につきつけてくることであろう。

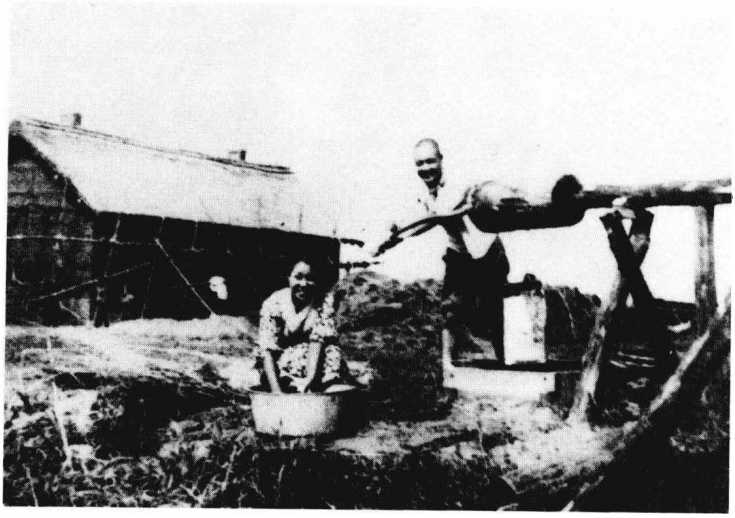
南方の孤島に一人の旧軍人が生きていることを知ると、日本政府は許す限りの金と人を投じて捜索、帰還に尽力してきた。もちろんマスコミも協力した。しかし、生きるためやむなく中国に残留することになった元国策花嫁たちに対しては、「お国のために召された軍人とは立場が違う」とか、「彼女たちはみずから希望して渡満し、自分の意志で中国人と結婚した」との見解に立つ政府は責任をとろうとしない。そればかりではない。「中国孤児」の調査には遅まきながらそれなりの対応を示しても、残留婦人を調査の対象外としてきた。こうした日本政府の見解、対応がいかに誤りであり無責任であるかを明らかにすることも執筆の動機である。

私の胸に、いつのころからか「大陸の花嫁」の実態、全体像を知りたいとの思いが芽生えてきた。

今から十年前に満州移民について加害と被害の両面に視点を据えて、『凍土の碑—痛恨の国策満州移民』をまとめた。次いで義勇軍のなかば強制的送出を担った当時の教育と教師の責任を考えながら、義勇軍とはいったい何であったかを『先生忘れないで！—満州に送られた子どもたち』（梨

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の木舎一九八八）に整理してみた。これらの延長線上に立ち、本書では「大陸の花嫁」に的を絞り、その実像に迫ってみることにした。



満洲での生活のひとコマ
（埼玉県の元中川村開拓団員・宮崎由雄氏提供）

目次

はじめに　1
大陸の花嫁とは何だったか　12

第一章　満州に渡った「大陸の花嫁」たち　17

1　四二年後の帰国——根津マツさんの場合　18

集団自決は避けられなかったのか　大陸の花嫁誕生　日本が戦争に敗れた　中国人との結婚　日本人の加害と被害

2　開拓の先駆者　32

中国人に売られた古田土キイさん「開拓の先駆者は女たち」

3　大陸の花嫁たちへのインタビュー　40

「非国民」の兄をもつ嫁だからと離婚される（矢沢始さん・長野県）　相手の写真を見ることなく結婚（岡田千諭子さん・広島県）　大陸の花嫁希望（竹野菊枝さん・広島県）　親孝行になるならば（駒村勝さん・長野県）　宣伝に心ひかれて（古屋きみえさん・長野県）　ニュース映画で知った大陸の花嫁（国分なつよさん・福島県）　満州は日本の国と思っていた（大久保初枝さん・福島県）　お国のために（川崎かね子さん・静岡県）　現地で恋愛結婚（小関タマさん・山形県）　両親は反対しなかった（関志づ江さん・茨城県）

4　勤奉隊の女性たち　65

第二章　現地で待っていたもの　71

1　産めよ殖やせよ　72

「匪賊」に襲われた花嫁　現地に着いた途端に夫との別離　土饅頭のような家屋　ホームシック　「産めよ殖やせよ」　野の花の慰め

2　視察者の見た現地生活　84

雨宮与志さんの話　『主婦之友』特派員・吉屋信子の記録

3　女性たちのたたかい　90

同志の集い　第一次宝石義勇隊開拓団の軌跡　開拓団を後にする　苦難の幕開け　◎国分なつよさんの話（福島班）　◎柳沢みよえさんの話（長野班）　◎林　義子さんの話（長野班）　◎樋口キソさんの話（団長夫人）

第三章　花嫁たちの犠牲はなぜ大きかったか　99

1　関東軍のうらぎり　100

関東軍に殺された開拓民

2　男子団員根こそぎ召集・動員　103

二つの開拓団から

3　中国人の恨みと憤懣の爆発　105

土地を追われた中国人・朝鮮人　土地を奪われた朝鮮人へのアンケート　現地民の開拓団襲撃

4　集団自決　114

5 女性ゆえの犠牲 117
母親に絞め殺された娘　引揚げ後も続く母の苦悩　犠牲は幼児から　婦女子の犠牲は男子より大きかった
6 日本人の傲慢と貪欲と蛮行 129
(1) 戦争と開拓団　(2) 開拓団の悲劇は満州移民政策とその実施からはじまった
(3) 国体護持を最優先してポツダム宣言を受諾　(4) ソ連軍の占領政策への疑問
(5) 日本人の傲慢と貪欲と蛮行　日本軍兵士の蛮行　日本人の蛮行　馬車のただ乗り　日本人女性のおごり——元憲兵久保田国久氏の話　日本人女性のおごり——元満州拓殖公社職員の話　苦力に殺された大陸の花嫁　中国労務者を殺した日本人日本軍は日本人の罪業を知っていた

第四章　大陸の花嫁はどのようにして送り出されたか 147
1 大陸の花嫁養成機関について 148
女子拓植指導者の養成　女子拓植講習会　東亜建設女子同志会の結成　開拓女塾
女子拓植訓練所の設置　配偶者斡旋協議会の設置
2 花嫁養成の実態 152
最初の大陸の花嫁　大陸の花嫁講習会はじまる　●山梨県の場合　●三重県の場合　本格的な取組を迎える　●静岡県の場合　●広島県の場合　現地に開設された開拓女塾　長野県立桔梗ヶ原拓務訓練所の創設　訓練所の生活　開拓女塾誕生の経緯　佐々木春子さんの回想

3 大陸の花嫁を選んだ動機 172
自分の意志で　大陸にあこがれて　お国のために　町村役場への割り当て、教師のすすめ　貧しさのために　結婚難　宣伝にひかれて　縁故関係
4 困難だった花嫁送出 180
大陸の花嫁訓練の実績　国内の事情は大陸の花嫁どころではなかった　新聞も花嫁送出に協力した

第五章　おろかもの之碑 187
1 女性たちを待ちうけていたもの 188
「異民族のタネ」は根絶せよ
2 引揚げ者への差別 192
「お前たちの分はない」
再入植した人
3 引揚げ者への保障について 197
開拓民の場合
ドイツの場合
4 移民の父加藤完治の責任のとり方 204
「一番大切なことは国体の護持」
5 おろかもの之碑 209
巧妙な衣替え　岸信介氏　鈴木俊一氏　昭和天皇と大日向村開拓団　おろかも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の之碑　それぞれの発言と行動　事実を知ることから——武市文恵さん　「侵略という車に乗ってしまった」——矢沢妗さん　国の扇動にのってはいけない——福岡三つめさん　平和と環境問題に取り組む——深谷富士子さん　悔い改めと希望と——川西田鶴子さん

【満州という国】　230

【「大陸の花嫁」略年表】　232

あとがき　236

凡例

※「満州」は現在の中国東北地方である。「満州国」は一九三二年に日本がつくったかいらい国家であり、中国人は「偽満」（ウェイマン）と呼んで認めていない。本来なら「満州」・「満州国」はすべてかっこを付すべきであるが、本書では繁雑さを避けるためにはずしてある。また当時使われた文字は滿洲であるが満州とした。

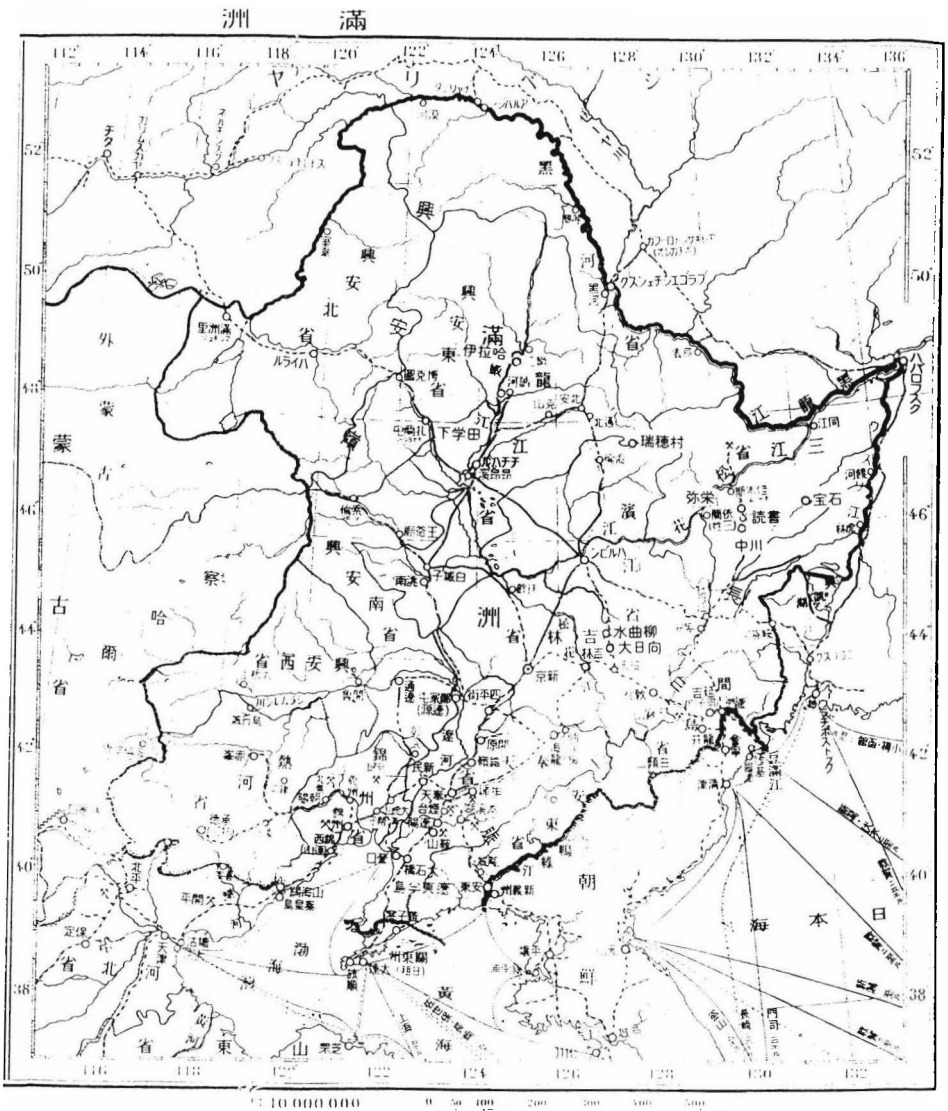
※地名、省名等は当時のままとした。

※引用文の旧字、送り仮名などは、現在のものに改めた。

※年号は西暦使用を原則としたが、昭和史とかかわっているのでカッコ内に昭和の元号も付した。引用した文献で戦前の出版書については、発行年度をそのまま使用した。

※本文中、お話をうかがった方々の年齢は一九九一年現在である。

※本書で扱う主な開拓団の所在地は、満州の地図上に示した。


滿洲
ヤクーツク
ハルビン
ハバロフスク
ウラジオストク
ルライハ
里洲滿
伊拉哈
下学田
瑞穂村
弥栄
読書
宝石
中川
水曲柳
大日向
吉林
京新
間島
天寶山
朝鮮
日本海
黄海
渤海
蒙古
外蒙古
興安北省
興安東省
興安南省
興安西省
黑河省
吉林省
熱河省
錦州省
奉天省
東三省
東部内蒙古
察哈爾省
北平
天津
青島
濟南
徐州
南京
上海
杭州
寧波
福州
廣東
廣州灣
海南島
海防
ハノイ
ラングソン
ハイフォン
ハノイ
ヒエン
ビエンチャン
ルアンパバン
ムアンプン
ムアンパン
ムアンパット
ムアンパット
ムアンパット

「大陸の花嫁」とは何だったのか

開拓団の名で知られている国策満州移民の実施期間は、満州国成立の一九三二年（昭7）から一九四五年（昭20）までのわずか十二年余にすぎない。この間、開拓団在籍者は約二七万人に達した。が、満洲国滅亡とともに満州移民は崩壊し、世界の移民史上類を見ない総引揚げをもって幕を閉じた。

移民は他国に移住することであるから、相手国の了承なしに成立しない。しかし満州移民は、日本人が一方的に集団で入植するものであった。そのため、大和民族の大移動ともいわれた。このことを可能にした理由を探ると、一九三一年（昭6）の満州事変と翌年三月の満州国樹立につきあたる。満州国（中国東北部）とは名ばかりで、実権は日本人が握っていたからである。

元開拓団の人たちに、「当時、満州をどう思っていましたか」とたずねると、ほとんどの人から

「日本が占領した国だから日本のものだと思っていた」

「日本が戦争に勝ったのだから、日本が自由にできる国だと思っていた」

との答えが返ってきた。そのため、満州に渡るとき他国に行くような気持はなかったという。

当時の『新日本図帳』（刀江書院昭和九年）は、「満蒙地方地勢交通図」を載せている。また一枚の『最近大日本鉄道地図』（鉄道省編纂昭和十一年）は、日本本土以外に南樺

太、台湾、朝鮮はもちろん満州も載せてある。地図帳、鉄道地図でさえ満州は日本の一部といった扱い方をしていたのである。

多くの日本人は、戦争に勝った国は、負けた国あるいはその支配下にある国の一部を自国の領土にできる。自国の領土にできなくとも意のままにできる。尊い兵士の血潮と莫大な軍費を費やし、「天に代わりて不義を撃った」以上当然である、と考えるに至っていた。

したがって当時の日本人が、満州は日本のもの、との受けとめ方をしていたことは容易に理解できる。

「大陸の花嫁」たちは、こうした時代のなかで満州に渡って行った。

武装移民と呼ばれた第一次移民団が渡満したのは、満州国成立の一九三二年（昭7）の秋である。一九三六年（昭11）、関東軍主導の「二〇ヵ年百万戸送出計画」が決定されると、満州移民事業は国を挙げて推進された。この大人主体の移民団を一般開拓団（成人開拓団）といった。三八年（昭13）には、「満蒙開拓青少年義勇軍」制度発足、これら青少年移民団を義勇隊開拓団と呼んだ（満州では義勇軍を義勇隊と称した）。

大陸の花嫁とは、この二つの開拓団の団員と結婚した女性たちのことをさす。が、一九三八年（昭13）ころから盛んになる大陸の花嫁養成運動の対象は、主に義勇軍であった。もちろん一般開拓団にも花嫁を求める団員がいた。

移民の成功は「鍬と鍋」にあるといわれた。鍬は農業経営であり鍋は家庭を意味する。どちらも女性ぬきには成り立たない。男たちは家庭をもつことで安らぎと活力をえ、営農への希望もふくらみ落ち着いて大地と取り組むことができる。移民村の将来は、花嫁招致いかんにかかっていたといえる。

大陸の花嫁には次の任務もあった。北満の国境守備隊長は、大日本連合女子青年団が派遣した女子指導者開拓地視察団の一行に、「満州の軍隊は戦って移動する。そのあとを開拓民がしっかり根をおろす。日本民族が根をおろすのに、女性の力は大きい。そういう娘さんが必要なのです」と語った。

開拓団は、関東軍（満州に駐屯していた日本軍）の国防と治安維持に協力するほか、関東軍の兵站（食糧、飼料の供給など）の役割をも負わされていた。したがって花嫁たちは、意識するとしないとにかかわらずその役割を担っていたことになる。

大陸の花嫁たちはこのような現地の実態を知ることなく、満州には食糧がいっぱいある、広漠たる新天地は日本人を待っている、戦争も空襲もない、といった宣伝を疑わずに信じて満州に渡って行った。だが、満州こそ最も危険な戦場であることに気づくには、長い時間はかからなかった。

大陸の花嫁の多くは写真だけで、なかには挙式の時まで相手の顔も知らないまま結婚を決めた人もいた。彼女たちは「大陸の花嫁」「土の花嫁」「拓士の花嫁」などともてはやされたが、実質は「国策花嫁」というべきものであった。

昭和の初期、大陸の花嫁が登場した期間はおよそ十年間である。その間、どれほどの女性が大陸の花嫁として満州に渡ったのか、残念ながらその数字は残されていない。

本書では、当時、女性たちがいかなる動機、考えのもとに大陸の花嫁を希望したのか。花嫁養成運動の実態と実績はどのようであったか。現地での生活、またソ連軍の満州進攻と日本の敗戦による逃避行など言語に絶する苦難を、帰国後も続いたいばらの道と合わせてのべてみたい。満州移民の犠牲が花嫁と子どもたちに多かったのはなぜか、その理由も考察したい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com